

平成30年度

コレクション展示作品目録

展示室3

展示室3 現代の美術Ⅲ 2018年9月15日(土)～11月11日(日)

この展示室では、当館の現代美術コレクションより、1960年代から80年代にかけて制作された日本人作家の作品を展示しています。第二次世界大戦後、多くの日本人作家がアメリカやヨーロッパに渡り、活躍しました。1950年に渡米した岡田謙三は、当時隆盛だった抽象表現主義の流れの中に身を置き、60年代には繊細な色調と多様なマチエールを持つ色面を並置して日本の「幽玄」を感じさせる「ユージュニズム」と呼ばれる表現を確立しました。

菅井汲は1952年パリに渡り、アンフォルメル潮流に乗った表現主義的作品によって高く評価されますが、60年代半ば頃からは幾何学的形態とフラットな色面を特徴とする表現へと展開します。さらに70年代以降は、基本的図形の反復によるシステムティックな絵画制作へと向かっていきます。

1950年代末から約10年間、イタリアを中心にヨーロッパで活躍した保田春彦は、帰国後、ステンレスを素材に、情緒を排除した硬質な抽象彫刻を発表します。アンフォルメルや抽象表現主義の「熱い抽象」から、幾何学的でミニマルな「冷たい抽象」へ、という世界的な美術動向を反映した表現と言え、菅井汲の同時期の絵画とも響き合います。

荒川修作は1961年ニューヨークに渡り、パートナーのマトリン・ギンズと共に記号や文字を画面に採り入れた図式的絵画を確立します。哲学的な思考を絵画平面上で展開し、抽象表現主義以降のコンセプチュアルな動向の一翼を担います。

1970年に渡欧した白川昌生は、ドイツ、デュッセルドルフ国立美術大学で彫刻を学びます。「赤一彫刻」のシリーズは、デュッセルドルフ時代から83年の帰国をまたいで89年前橋に拠点を据える頃まで続けられたシリーズで、赤く染めた木材による立体だけでなく、オイルパステルによるドローイングも盛んに制作されました。そこには、実際に立体化されなかったものも含め、様々な彫刻のアイデアが紙上に広がる空間に配置されています。

1980年代に頭角を現した川俣正は、板材による仮設の構造体によって建造物や場所を容容させ、それらが持つ歴史や記憶、特質や問題を浮かび上がらせます。82年のヴェネツィア・ビエンナーレや87年のドクメンタといった国際展への参加によって評価を確立していきました。

戦後から現代へ、日本の作家たちの活動が、当たり前と同時に時代の表現として世界に発信されるようになりました。今回の展示によって、その過程の一端をご覧ください。

No.	作者名	(生没年)	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	備考
1	岡田謙三	(1902-1982)	ダブル・ランドスケープ	1974	油彩・カンヴァス	198.0×458.0	
2	菅井汲	(1919-1996)	日蝕	1965	油彩・カンヴァス	200.0×160.0	寄託作品
3	菅井汲		オートルート911S	1967	油彩・カンヴァス	160.0×200.0	寄託作品
4	菅井汲		V.80	1980	油彩・カンヴァス	200.3×200.3	寄託作品
5	菅井汲		五月	1987	油彩、アクリル・カンヴァス	197.0×197.0	寄託作品
6	保田春彦	(1930-2018)	1m立方体	1970	ステンレススチール	110×100×121.5	
7	荒川修作	(1936-2010)	アルファベット・スキンNo.3	1965-66	油彩・カンヴァス	229.5×369.0	寄託作品
8	荒川修作		分割された連続体	1965-66	油彩・カンヴァス	160.0×243.0	寄託作品
9	荒川修作		序	1974	アクリル・カンヴァス	195.5×305.4	寄託作品
10	白川昌生	(1948-)	赤一彫刻	1987	オイルパステル、鉛筆・紙	135.4×251.0	安達真枝氏寄贈
11	川俣 正	(1953-)	デストロイド・チャーチ・プロジェクト (カッセル、ドクメンタ8)、プラン・ド ローイング	1986	アクリル、鉛筆、バルサ材、合板	243.0×366.0×10.0	寄託作品
12			デストロイド・チャーチ・プロジェクト (カッセル、ドクメンタ8)、プラン・モ デル	1986	バルサ材、合板	91.8×211.7×130.0	寄託作品
13			デストロイド・チャーチ・プロジェクト (カッセル、ドクメンタ8)、フォト・ド キュメント	1987	カラー写真・パネル	125.0×200.0	寄託作品